創業8年間で薪ストーブ300台
2018年浅虫に新店舗オープン

2018夏　移転OPEN

――の看板が目に付いた。場所は、浅虫温泉の国道4号沿いに建つ東消防署浅虫分署の隣。現在、青森市自由ヶ丘にある薪ストーブプロショップ『wood rack』（ウッドラック）の新店舗が、2018年夏までにここに完成するのだ。8年前、工務店の工務責任者だった相馬壮代表が地域木材の需要拡大を目指す活動の一翼を担おうと一念発起して立ち上げたのが『wood rack』。スタッフの石村真弓さんとともに、部品を外し軽くしても100キロは優に超える薪ストーブを2人がかりで県内各地の現場に搬入、設置してきた積み重ねが300台なのである。

県内で薪ストーブの販売から修理、メンテナンスまでこなすプロショップは数社しかなく、青森市内ではウッドラック1社のみ。未開拓の業界に足跡を付けてきたこの8年間を振り返って相馬代表は、現状をこう話す。

「薪ストーブって、薪を入れて燃やせばいいって簡単に考えられがちですけど、現実には、うまく使えていないケースが非常に多いんです。暖かくない、燃えないというクレームの原因の8割は薪にあります。理屈は簡単で、乾燥していないから燃えないだけなんです。くすぶる煙は金属をサビさせる酸性の木酢液を発生させるし、煙突内にはススとタールを付着させ煙突詰まりや煙突火災に繋がり、街なかでは煙害でご近所に迷惑をかける。まず、しっかり乾燥した薪を準備することが薪ストーブライフの第一歩で、乾いていない薪での暮らしって、一つも幸せじゃないんですよ」

毎年5月から半年間がメンテナンスシーズン。屋根に上がって煙突掃除をするのが相馬代表で、室内でストーブ本体の炉内に顔を突っ込んでススだらけになりながら清掃・点検・修理・調整をするのが石村さんの役割り。全国でも仕事として薪ストーブに関わっている女性はいるものの、年間にこなすメンテナンス数はせいぜい10台程度なのに対し、石村さんは桁違いの120台。薪ストーブを知り尽くしているプロの〝ファイヤーウーマン〟だからこそ、薪ストーブの

遠赤外線効果で体の芯まで暖めてくれる薪ストーブ

人気の屋外用薪オーブンを持ち出してのイベント出張『ウッドラックキッチン』。左が石村さん、右が『ウッドラックオーナーズクラブ』の渡辺悟隊長

試運転の際に2〜3時間もかけてお客様に〝燃やし方〟を説明をするのだ。

「炎が勢いよく上がっている状態がピークなのではありません。しっかり乾いた薪を、薪の底力である〝熾（おき）〟に育てます。そこからが〝本番〟で、炭火のように赤化して炎をあげずに燃え続ける熾火燃焼によって遠赤外線効果を得る事ができ、体の芯まで暖めてくれるのが薪ストーブなんです」

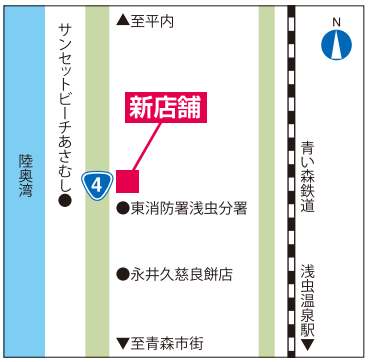
薪ストーブの人気に伴い、薪ストーブ販売店は増えたものの、全てに対応できる専門店は数えるほどしかない、乾いた薪を提供できる所も殆ど無い、となると、どんな問題が生じるか

――相馬氏は指摘する。

「知識の無い工務店や大工、販売店が見よう見まねで取り付けているケースもあります。だから可燃物までの安全距離が確保されていなかったり、安く済ませる為にメンテナンス性を考慮していなかったり、ひどいのになると『煙突掃除なんて必要ない』なんて無責任なことを言っている業者もいたり……。〝薪ストーブ難民〟を増やさない為にも、今後は薪ストーブ業界にも、安心して任せられる〝資格制度〟が必要なのではないか。その段階にきていると思いますよ」

woodrackを支える〝根〟のような存在が、現在、100家庭を超えるユーザーたちで組織する『ウッドラック・オーナーズクラブ』の面々だ。オーナーズクラブの〝交流〟の場は、フェイスブック。その声を拾ってみると――「実家はかなりの山持ちですが、固定資産税ばかり支払って意味のない物だと思っていたのに、薪ストーブを始めてからは〝宝の山〟です」「薪運びを手伝ってくれる子供たちが虫を怖がらなくなりました」「薪割り、搬入、庭への灰撒きなど家族ぐるみでやるようになってから会話が増えました」「大規模な停電になっても薪ストーブと薪があれば心が荒まないように思う」……。また、「岩木川沿いの樹木　伐採利用者を募集」など新聞切り抜きをアップして情報提供をしたり、新米ユーザーへのアドバイスも投稿してくれる。

2018年夏オープン予定の新店舗



薪ストーブと木の雑貨
Wood rack
ウッドラック
青森市自由ヶ丘1丁目2-13
TEL.017-752-0133　FAX.017-752-0134
E-mail : info@woodrack.jp
ウッドラック
オーナーズクラブマーク

マルヤマウッドワークス

青森市郊外に、ターザン現わる！　――場所は、戸山団地から3キロほど離れた沢山野際（のぎわ）。約900坪という敷地に立つ、クリとケヤキの木の間に張った長さ15mのロープを、滑車付きのターザンロープにぶら下がって滑空するのは、丸山洋さん。「木」で作るものならテーブルや椅子から、大きいものは住宅まで建てるという〝一匹狼〟の大工である。ターザンロープはむろん2人の男のお子さんの遊び道具だが、40代を迎えた丸山さんも、ぶら下がれば童心に返るようだ。

異色の経歴をもつ大工の丸山さん

ゆくゆくは敷地内に住宅展示場を建てる、のが丸山さんの夢だという。「ただ見学するだけじゃなく、中に喫茶店をつくりたいんです。そこでコーヒーを飲みながら、家づくりについて語り合ったりね」と丸山さん。「展示場ではあるけれど、そこではヨガ教室やライブ等のイベントもやりたい。木々に囲まれた素敵な場所に、大人も子供もふらっと来てほっこりできる空間を作りたいっていう結婚当初からの2人の夢があるんですが、ようやく形にしようとしているところです」。昨年と一昨年、奥様の友人がここのケヤキの木の下のステージで野外コンサートを行ったそうだ。大工の仕事をしながら合間に建設の準備を進めているのだから、「いつ完成するか分からない展示場ですよ」と丸山さんは笑うが、この沢山地区に土地と家を取得して4年、スギの丸太を何本も寝かせて乾燥させながら、夢の実現へ少しずつながらも着実に歩を進めているのである。

合掌造りを想わせる外観の4階建てが、丸山さんの自宅だ。林に囲まれたロケーションが気に入って、築35年の中古住宅（延べ50坪）込みでこの土地を取得したという。

ターザンといい、また戸数が10数軒しかない小さな集落に住宅展示場を建てる夢といい、丸山さんは、ユニークである。普通の大工とは、違う。世間の常識に捉われない、道なき道をゆく生き方。

丸山さんによると――新婚旅行はインドへ。海外旅行なら珍しくはないが、新婚旅行先のインドにそのまま半年間も滞在した、となれば、珍しい。しかも、タージ・マハルなどの観光名所には目もくれず、場当たりに〝行き先が読めない〟路線バスに飛び乗り、降りた先で、初めて会う現地人に連れていってもらった森の奥にガイドブックには載っていない見事な滝があって見惚れた――などという話を聞くにつけ、そのスリリングな体験よりも、丸山さんという人

ターザンロープにぶら下がって滑空する“自由人”

いつ完成するか分からない展示場 〝夢〟に向かって自由に生きる 大工

仕事の合間をぬって作業場づくりに励む丸山さん

間に興味が湧いてくる。

生まれは茨城県。学校を卒業して東京の家具屋に就職した。奥様とは東京で知り合ったという。丸山さんは、お金を貯めてはインドやタイ、屋久島や小笠原などへ旅行していたそうだ。実は奥様も旅好きで、モロッコやエジプトやインドへ。結ばれるべくして結ばれたご夫婦である。インドから戻ってくると、北海道へ行って林業に就く。このへんもインドでの路線バス同様に〝行き先の読めない〟人生を歩む。北海道ではテレビの電波も届かない山奥の農家に住んでいたとか。お子様が生まれることになって、奥様の出身地である青森市へ。ここで大工に転身した。

丸山さんについて、青森市内のMさんはこう話す。

「わが家の無落雪屋根の破風に、錆が目立ってきたので、ペンキを塗ってくれるところを探していたんですが、そんなちっぽけな仕事はどこも誰も相手にしてくれません。そんならいい人がいる、と紹介されたのが丸山さんでした。地面から伸ばしたハシゴが揺れるからと、一旦作業場に戻ってこしらえてきた、屋根にかける木の枠の支えにつかまりながら、半日がかりで塗ってくれました」

その丁寧な仕事ぶりに惚れて、Mさんは近くに住む母親の家の下屋の修繕も頼むことに。築40年で、下屋を支える柱の根元が腐って穴が空いていたそうだ。Mさんは話す。「たぶんそのへんの工務店に頼めば、大工が2、3人でやってきて2日くらいで片付けてしまうところを、丸山さんは、1人で、朝の8時から夕方の6時まで、5日もかかって、柱ばかりでなく、落雪の衝撃で剥がれた軒天までも新品同様に直してくれました。母の家は、最後には、頑丈になった下屋が残ることでしょう」

合掌造りを想わせる外観の4階建ての自宅

丸山さんは〝週末養蜂〟もやっているとか。ニホンミツバチの蜂蜜を集めるのだ。「要は趣味ですよ」と笑う。

好きなことをやるのが人生——自由人の丸山さんにぴったりの言葉である。